

鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵

『阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記』翻印

亀井 森\*・生田美津希\*\*

(二〇一六年一〇月二五日 受理)

The transliteration of Aso Genyo,

*Konoenobusuke gubu joukyo nikki*

KAMEI Shin, IKUTA Mizuki

## 要約

本稿は鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵『阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記』を研究資料として活字化するものである。本資料は、文禄五（一五九六）年七月、薩摩配流を許された近衛信尹（のふたけ）（信輔）の帰洛に際して、島津氏から随行した阿蘇玄与（げんよ）が記した紀行、および在京日記である。島津氏および近衛信尹研究はもとより、度々登場する細川幽斎、黒田如水・毛利輝元などの武将の動向、戦国時代の文事を窺うことのできる資料である。

また本資料とほぼ同じ内容をもつものとして、『群書類従』所収の『玄与日記』がすでに備わるが、本資料とは本文の異同が見られることから、玉里文庫蔵『阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記』を活字化・公刊することによって、今後の研究、および学界に寄与することができると考えている。

キーワード…鹿児島大学附属図書館玉里文庫、近衛信尹（信輔）、阿蘇墨斎玄与、細川幽斎

## 解題

本書は、文禄五（一五九六）年七月、薩摩配流を許された近衛信尹（信輔）の帰洛に際して、島津氏から随伴した阿蘇玄与（げんよ）が記した紀行および在京日記である。阿蘇玄与はその道中で詠まれた和歌、発句を書き留め、京都での滞在時にどこを巡り、誰と会い、何をしたかについて詳細に記している。おそらく本書は、島津氏への報告書として性格も帯びていたと考えられ、島津氏の饗応役としての役割を果たした玄与の視点で記録された貴重な資料となっている。すでに早くより本書の価値は認められており、島津氏および近衛信尹研究はもとより、度々登場する細川幽斎、黒田如水・毛利輝元などの武将の動向、戦国時代の文事を窺うことのできる資料である。

本文については『群書類従』第十八輯卷第三百二十五に「玄与日記」（以下、群書類従本）として収載、活字化されており、先行研究もおおむね群書類従本を以て行われている。しかしながら玉里文庫蔵の『阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記』（以下、玉里文庫本）と群書類従本ではそれぞれの写本が基とした親本が異なると考えられ、少なからず異同が見られる。また玉里文庫本には群書類従本には見られない奥書なども残されている。その意味において、今後の研究の利便を考え、玉里文庫本を資料として本紀要に活字化・掲載し、その一助とすることを本稿の目的とする。しかしながら、猶、私の力不足による翻字の誤りが多く存すると考えられる。識者のご教示を賜りたい。

さて、作者である阿蘇玄与について『和歌文学大辞典』（『和歌文学大辞典』編集委員会編、古典ライブラリー、平成二十六年）「玄

与」項によれば、

阿蘇惟賢。黒斎（あるいは墨斎か）。生没年未詳。本姓宇治氏。阿蘇神社神官の家、阿蘇惟前の男（『神道大系阿蘇・英彦山』所引「阿蘇系譜」）。一時、菊池氏に属したこともあった（『系図纂要』菊池系図）。秀吉の島津征伐にともない、天正十六（一五八八）年に父とともに薩摩へ逃れ島津氏に身を寄せた（『旧記雑録後編』卷一九所引「阿蘇玄与入道墨斎書出」）。『旧記雑録後編』卷七七所掲の法楽連歌により、寛永元（一六二四）年五月八日までの生存が確認できる。紀行日記に『玄与日記』がある。

（三三六頁、鈴木元執筆）

とある。この阿蘇玄与については、桑田忠親が「玄与日記とその作者」（『歴史地理』第六十二巻六号、昭和八年十二月）において阿蘇家譜、書状、阿蘇文書等を索搜して出自や行状を論じ、「黒斎」と断定している。しかしながら玉里文庫本では明らかに「墨斎」である。いずれにしても本書によつて阿蘇玄与の和歌連歌の素養が、当代を代表する歌人の一人に数えられていた近衛信尹の相手を務めることができるレベルにあったことを窺わせる。

また鹿児島から京までの旅の詳細、また在京時の玄与の動向については、『群書類従』第十一（昭和三十五年、続群書類従完成会）「玄与日記」（八〇頁）、および白井忠功「黒斎玄与の旅——『玄与日記』」（『立正大学人文科学研究年報』、一九九〇年）において触れられており、そちらに譲る。

最後に、本書の書写者である島津久光については、その略歴に触れるまでもないだろう。幕末の薩摩藩を主導し「国父」として維新

期に存在感を示したが、一方で学問愛好、書写癖についても茲に有名である。玉里文庫には島津久光自筆の歌集・歴史書が多く残されているが、本書もその一つとして考えられ、久光の蔵書印である「梨雲書屋」を残す。青墨による校合跡も久光の可能性がある。

## 書誌

『阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記』

所蔵：鹿児島大学玉里文庫（天—五仁—六八）

表紙：山吹色布目地に丸に十字と五七桐紋散らし（空刷）

二七・〇cm×一九・六cm

外題：阿蘇墨斎玄与近衛信輔公供奉上京日記 全（島津久光筆）

巻冊：写本一冊、全二〇丁。

編著者等：阿蘇墨斎玄与

成立：慶長二年四月（奥書）

書写者：島津久光（明治十五年）

書入：有（青墨）。

蔵書印：「梨雲書屋」（朱陽椿円、四・〇×二・二cm）

## 凡例

一、本文表記は出来る限り底本に忠実であることを心がけたが、読解の便を考えて次の様な処置をした。

1、漢字はできる限り通行の字体を用いたが、異体字・固有名

詞などで底本のままにした場合がある。

2、内容不詳の箇所は（ママ）とした。

3、反復記号「ヽ」「ゝ」「／」は残したが、漢字の後の「／」

「ヽ」「／」等は「々」に統一した。

4、適宜、句読点および濁点を付した。

一、送り仮名は原則として底本の形に従い、また底本の仮名遣いが歴史的仮名遣いと異なる場合もそのまま底本に従った。

一、丸括弧内の注記はすべて筆者の注記である。

一、丁移り・表裏の別は、「二〇」のように示した。

一、本文の脇に細字で施された書入についても底本に従った。

本稿はJSPS 科研費「近世後期九州の国学の統合的研究」（16K02409）による研究成果の一部である。

(扉)

阿蘇墨齋玄与 近衛信輔公

供奉上京日記

(本文)

覚

文祿五年七月十日。薩州鹿児島より近衛前左大臣殿公信編御帰路治なり。  
拙子事乞二供奉一、御船海上に出侍れば、鹿児島之僧俗船に乗、御  
名残をしたひ奉レ送ぬ。十日の晩景に大隅浜之市に御着船。則相良  
吉右衛門尉所御旅館に成る。明る十一日。龍伯館にて御歌の会を申  
すゝめらる。

兼題 松蔭新涼

へ立帰る名残こそあれ松かげは

すゝしき秋のやどりと思へば

杉

へあつき日の影もわすれて馴なるゝ

松のしづへに秋風ぞ吹

龍伯

へとりよるもかわらぬ友と松かげに

かたらふ秋の袖の涼しき

進藤殿治長「(二才)

へ枝しげき松の下露落そひて

衣手涼し秋のはつ風

玄与

当座 早秋月

へ見るほどもまだみじか夜や秋といへば

月にあかなきはじめ成るらん

杉

薄露

へゆく袖をむすびもとめよ糸すゝき

末葉の露は玉とちるとも

龍伯

夕鹿

へ狩人のいる矢もゆるせあわれしらは

つまこふ鹿の夕暮のこゑ

杉

隣掃衣

へ聞なれてちかき隣のきぬたさへ

更行空はかすかにぞなる

幸侃

河霧「(二才)

へ秋風にまほ引船のゆくゑにや

分ていらまし淀の川霧

杉

籬菊

へゆるされぬまがきのうちの菊の花

たゞ咲こすをよそに見よとや

珠長

峰紅葉

へみる人の心はゆきてたをらぬも

かざしになれるみねの紅葉ば

玄与

寄鏡神祇

へ神がきのうちゆたかにもうつしおく

心やよゝの鏡なる覧

龍伯

此外御会の人数十五人程侍りし。ひるより始り深更に成り御成就なり。同十二日には御座敷能あり。十三日には秋月入道宗闇舞台にて能九番興行なり。十四日早天に、めぐり<sup>江</sup>御船寄<sup>ニテ</sup>移おわします。幸侃仮屋御旅所に成。十五日はめぐり<sup>江</sup>御逗留。十六日。庄内<sup>江</sup>渡御なり。龍伯、庄内迄送り被申候。十九日。幸侃宿所にて御当座の御歌あり。折節草花座敷に侍れば、

さをしかの音もかよひなん秋草の

花をこがめにさせる宿には

御家門様

花々を分にし野辺のかへるさや

手折もてきてかめにさすらん

龍伯

秋草のはなもてかざる宿と見は

とひくる袖にし<sup>よ</sup>ばしとぐめん

幸侃

玉たれのこがめの花は秋の<sup>ママ</sup>

露にしられず盛なるかな

玄与

此外にもあまた侍りつれども洩らし侍りぬ。廿日。幸侃所にて座敷能あり。打続き廿一日。秋月入道興行也。廿五日。志布志<sup>江</sup>御着被成候。大慈寺といへる寺、御旅宿に成る。彼寺の坊主参扣、<sup>ニテ</sup>則和漢のあらましある。拙子<sup>江</sup>発句つかふまつるべきよし近衛様尊意のまゝ仕りぬ。彼寺松木ふかき所なれば、

波の声や松に入江の秋の海

玄与

蘆花招<sup>ニ</sup>釣船<sup>一</sup>

又御出船を祝侍りて、

追風も有明の月の船出哉

玄与

志布志<sup>江</sup>御逗留候間、相良吉右衛門尉、福岡久五兩人御旅のとゝのへ仕ぬ。閏七月五日に志布志を御出船なされ、くしまのうら、<sup>ママ</sup>ち<sup>ママ</sup>の湊といふ浦に夜更に御船を留めらる。秋月入道馳走被申候。七日。ち<sup>ママ</sup>の湊をこぎ出侍れば唐土かけて見侍りぬ。和田の原<sup>ママ</sup>こ<sup>ママ</sup>ざいでみれば久かたの雲井にまごふ沖つ白浪の歌おもひ合せ侍り。尤其日の暮かたに、この浦<sup>江</sup>御着なり。彼のうらに十日余り御船を留られ候。御徒然のあまり御うた有。

海辺月

和田の原むかふあらしにいかなれば

月のみふねのまほに行らん

杉

初会恋

つれなきにこゝろづくしのはてもいま

ありける物よあぶの松原

同

鞆中衣

峰をわけふもとの霧にぬれ衣

野ち行ほどや萩が花ずり

同

同じ題をくだされて

沖つ風吹につけてや夜半の月

くまも渚によするしら浪

玄与  
「三ウ」

しきかわす<sup>は</sup>新手枕は別路の

うきをも知らぬ心なりけり

玄与

袖の露にやどれる月の光りまで

やつしはてたる旅の宿哉

同

又詠五首和歌

初秋風

玄与

秋のくるかたとしられて西の海の

浪吹風もおとかわる<sup>は</sup>なり

松下萩<sup>萩殿</sup>

庭に生ふる松の根ざしやかよふらん

吹もたゆまぬ風の下萩<sup>萩</sup>

海辺暁月

あかつきの雲は消つゝ磯山の

嵐の上の月のさやけさ

寄露恋<sup>「四オ」</sup>

我が袖にくらべてやみむ消かへり

おく夕影の草の上つゆ

社頭君

あをぎくる君が千とせは住吉の

松のみどりにたぐへてぞみる

此外に近衛様二十首の御歌有。愚詠も二十首有。かくて浪風しづまり、十五日に内海といふ浦まで御成候。道すがらおもしろき磯山のありさまなど有。中にも、うとの岩屋を見侍りて、

千早振る神代に今もかへる波の

玉よりなぎさ見ぞ妙へなる

拙子氏神阿蘇の明神はうがやふきあわせ<sup>は</sup>ずのみことの御孫なれば、かく思ひつゞけ侍りぬ。又玉依姫も阿蘇の明神の御うばなればなり。内海にては日向伊東より御旅のとゝのへなど被申。」<sup>「四ウ」</sup> 十七日に陸地をおぼしめし立給ふ。御馬などのことゝも清武の城主川崎これを馳走也。進藤殿拙子は十七夜の月に船を出し侍りぬ。夜

分の船ぢ、いとゞ心ばそく侍りて十八日に細嶋<sup>江</sup>七ツ時に着侍りぬ。  
廿日に近衛様細嶋<sup>江</sup>御着被成候。細嶋にて県の主高橋九郎可然、侍  
を附置て御旅の調し侍りぬ。廿三日に細嶋を暁天に御出船にて豊後  
国の内、かまへと申浦<sup>江</sup>御着船候。海士の住里なれば御宿に成べき所  
所もなきに、松蔭ふかきあたりに古びたる寺有。是御宿に成べき所  
やらんとおもひ侍りて立入て見れば住人かげかすかなり。とりあへ  
ず狂歌申つゞけ侍りぬ。

古寺のあるじがほにてさびしさの

まぢかまへたる御宿成りけり」<sup>(五才)</sup>

俄にちりかきはらひ、疊所々しきて二日三日御逗留なり。夫より廿  
五日、御船を出し、同国よなふ<sup>(ヤ)</sup>へとやらん人家少き浦に御着船なり。  
此うらにて御発句有。

萩のこゑ梢にもろし浜<sup>ヒサギ</sup>秋

杉

真砂ぢとふき秋の夕浪

玄与

五十韻程御沙汰被成候。拙子又発句つかふまつりぬ。

夕霧に日の影しづむ三谷かな

と申候。京都にて紹巴隱居三井寺へ行て、此発句にて百韻独吟に申  
つゞけ見せ申候得ば、則右の発句に長あわれ候。八月朔日。御船を  
出し、海上一里計り過侍るに、日向船とやらん岩にあたり白波<sup>(五才)</sup>  
にしづみぬ。乗たる人はたすかり、哀れ成有様をみ侍りて弥船路の  
かなしさせむかたなし。大嶋と申浦に其夜を明し、三日に、ほとゝ  
いふ所<sup>江</sup>着給ふ。空泊りと申所ちかく見得ければ、

影きゆる月やいづこの空どまり

と申狂句仕候。夫よりさかの関まで御着なされ候。去七月十二日の

地震の時、かみせきと申浦里は、大浪にひかれて家かまどもなし。  
命をうしのふもの数をしらず。哀成事どもなり。彼の須磨の巻に、  
高塩におちてむすめをば岡部の里へやり侍ると見えしも、ことはり  
におもひしられ侍りぬ。同七日に伊予の海へ渡りぬ。あを島、ござ  
しまなど申浦々にうきどまりして讃岐へうつりぬ。爰に<sup>(六才)</sup>松山  
のみへたるをいかなる所ぞと浦人に尋とひ侍れば、是なんしらみね  
と申侍る。保元のいにしへ、崇徳院の、身は松山に音をのみぞなく  
とあそばされし御歌、今の趣におぼへ侍りき。十日。備後のものの  
浦<sup>江</sup>着給ふ。それよりは吹風も心のまゝにて播磨の室の津に御着な  
り。十五日朝天に室の津を御出被成、浪路はるくうつりゆく到高  
砂の松など見え侍りぬ。彼松、愚身先祖一見の事高砂のうたひに見  
得侍れば、由緒なつかしく見侍りぬ。最中の月を須磨あかしにて詠  
め侍りぬ。ゝ時しもあれ名高き空の月影を今宵あかしの浦に見る哉  
と侍りぬ。近衛様御詠歌別に書附侍る也。夫より和田の御崎、難波  
の浦づたひなど<sup>(六才)</sup>して大坂近くなれば、船子どものうたふこゑ  
にぎわしく成て、十八日に大坂<sup>江</sup>御着船也。地震の折節、波高く風  
はげしき海上つゝがなく侍りつる事、仏神の御守りうたがひなく思  
はれ侍りぬ。近衛様の御門前、市の如くに見得、枯たりし木の春に  
あへるごとく也。昔周公旦さすらへ立帰り給ふもかくこそと思ひ侍  
りぬ。太閤様より福原右衛門助、長谷川右兵衛尉両使御迎として参  
られ、都<sup>江</sup>御登りなされぬ。其比愚身所労の儀有。愚宿せんば町な  
り。近衛様拙子御覧あるべきとて夜<sup>(ヤ)</sup>に成て渡御成ぬ。忝事どもな  
り。ゆうしう法印<sup>江</sup>被仰良薬を用侍りて人心付ぬ<sup>(侍)</sup>。武庫様よりも伊  
地知与兵衛にて御尋被成、忝<sup>(七才)</sup>き事ども侍りぬ。然処に幽斎老

より御使下着候。九月六日。一葉の船をさし、秋風にさそはれて淀川をのぼり侍りぬ。江口の里など過て三島江のあたりにて夕月夜いとど入て村廬のほのか成かば猶哀也。明れば長月七日。八幡山、山崎など見侍りて伏見の入江に着侍りぬ。八日。武庫様<sup>江</sup>参上。武庫様拙子病氣草臥を被成御覽忝尊意など侍りぬ。重陽。幽斎老吉田より伏見<sup>江</sup>御下也。則<sup>兼</sup>拝顔也。十一日。竹崎千左衛門尉、幽斎老より御用の事ありて薩摩<sup>江</sup>かへし申候。伏見にて盛方院良葉を用ひ侍りて病氣能く成り侍りぬ。伏見より九月廿四日京<sup>江</sup>登侍りぬ。同廿六日。吉田にて幽斎御歌興行。<sup>(マ)</sup> <sup>(セウ)</sup>

爪木こる宿さへ秋の山路かな

二位法印玄旨

まがきをちかみおじか鳴音

兼如

見わたしの田西<sup>面</sup>の原は霧ふりて

玄与

廿七日。昌叱へゆき侍りて、近衛様<sup>江</sup>参上申也。十月朔日。吉田より幽斎老御供申、名所<sup>江</sup>を御おしへなり。吉田より新黒谷を通り東三条の森、鹿の谷などを見侍りて南禅寺へ参りぬ。南禅寺と新黒谷のあはひに法性寺あり。如意ヶ嶽など見え侍りぬ。僧正遍照の古跡、花頂山それより祇園の社、八坂のたふ、かつらのはし、驚の嶺、りうせん<sup>常</sup>。双林寺、ぎおんばやし、下川原、六条、鳥辺山、あみだが嶺、東岩蔵、又鳥部山のうへに十住院<sup>(マ)</sup>心けひの旧跡有。<sup>(ハオ)</sup>

東山の紅葉をみ侍りて、

冬かけては山に見ゆる薄紅葉

猶も時雨のあめや待らん  
と申侍りぬ。夫より東福寺つうてんき<sup>きやう</sup>ふを渡り、いなりの社、藤の森、

深草を分過て伏見へ着侍りぬ。神無月十一日。だいご寺のとなり石田と申所へ玄番頭殿御座候俣参りぬ。十三日。紹巴<sup>(マ)</sup>幽居三井寺<sup>江</sup>行侍りぬ。だいご寺まで玄番頭殿御送り也。笠取山、日野、山科、音羽里など通り相坂を越、大津<sup>江</sup>出申候。志賀の山ひらの高根のしぐれ、かゞみ山もかきくもり、水うみの船のゆきかひたぐひなき有様也。大津町にて玄番頭殿より役人被参、途中の御振舞、筆につくしがたきことども也。三井寺<sup>(ハ)</sup>坊舎皆々崩れ果、紹巴の栖居古寺の傍なり。終に閑談、遂日暮侍れば帰りぬ。三井寺のかね、さすがに残りてさびしきことどもなり。神無月十九日。大叡<sup>比</sup>の雪を見侍りて、

東路の空に心のかよふかな

都のふじゆき<sup>の</sup>をみれども

と申侍りぬ。又発句、

出る日やおしむ初雪朝曇り

雪にみつゝきや秋を忘草

又吉田に留まりて、

ふかき夜の夢路にかよふ松風は

月みよとてやおどろかすらん

十月廿三日。上京。兼如宿にて興行。<sup>(九オ)</sup>

とふやどのかごとなりけり夕時雨

玄旨法印

庭はもみぢの散り残るかげ

兼如

廿四日。近衛様<sup>江</sup>祇候。廿五日に伏見に下ぬ。其折節、健仁寺<sup>(マ)</sup>の雄長老<sup>江</sup>参扣す。又十月廿七日。紹巴より合点の連歌至来。其便宜に松前昆布送り給也。霜月より慶長元年に改元也。霜月三日。幽斎老



拙子と両吟被遊候。四日八ツ時、百句成就也。右の両吟名譽のよし、紹巴老人より褒美の一書預候。同四日。幽斎御宿二而、中国太守毛利殿<sup>江</sup>参会仕候。飛鳥井殿など御座候。毛利殿御盃御さし候。其晩景、若狭少将殿御発句にて伊勢物語幽斎御講釈也。聴聞人衆、少将殿、木下宮内少掾殿、<sup>（九ウ）</sup>山名禪高、山中山城守殿、溝口大炊助殿、其外曆々御人数なり。同日夜に成て紹巴より書状并又松前の一預候。十五日。吉田<sup>江</sup>登り侍りて、明十六日朝、菊亭前右大臣殿、幽斎御宿所にて御茶の湯なり。墨跡はぎだうの筆かゝる也。御相手に拙子御座敷<sup>江</sup>参侍りぬ。それより書院にて終日御乱舞。觀世太夫、其外京中の名人ども参候。幽斎老四番目の御子御茶智丸御太鼓遊し候。十七日。近衛様<sup>江</sup>祇候。十八日に吉田<sup>江</sup>歸り侍りぬ。其日、幽斎老基の会御興行。京中の暮うち皆々被参候。本因坊杯なり。せんやも被参候也。廿日。吉田にて連歌御興行。

氷りゐて行水ふかき川辺哉

昌叱「二〇オ

蘆の枯葉にまじる萍

玄旨法印

春風に田面の柳色みへて

玄与

日野大納言殿など御出座也。其懷紙、禁中より吉田神主殿を以被成勅言覧に備り候。拙子第三二世ならぬ冥加のよし京都にて人々被仰候。廿一日。北野社<sup>江</sup>参詣候。社頭にて、

春にみん山口しるし冬の森

と記り候。能札にて一折候つる。又道すがら嵯峨の山のつゞきの雪を見侍りて、

日の色もこほるか今朝の嶺の雪

夫より日野殿、飛鳥井殿、三条西殿などへ参り侍りぬ。廿二日。盛方<sup>（二〇ウ）</sup>院<sup>江</sup>参り南禅寺へ御茶智丸御逗留のまゝ参りぬ。廿三日。上京。幸前興行。

ちりちらす雪さへ花の都かな

玄旨法印

こすのと山のさむき朝風

幸前

廿四日。近衛様<sup>江</sup>祇候。鷹司殿御座候。将某仕候。<sup>廿六日</sup>南禅寺にて御茶智丸、能九番被遊候。廿七日。伏見<sup>江</sup>歸りぬ。三条河原のあたり曉とおり寒月の体、言語道断也。廿八日より伊勢物語の注うつし侍りぬ。八条宮様幽斎老<sup>江</sup>伝授の注なり。京都にも拙子下国までは禁中八条宮様御所までに御写被成候注にて候。極月五日。常真様にて幽斎老、能九番御興行。茶智丸三<sup>（二〇オ）</sup>番、常真様二番呉松など也。樋の口、又次郎兩人にて重平一番ばやし申候。九日に幽斎老丹州<sup>江</sup>御下向。拙子は御留主居し侍りぬ。是書写の本多き故也。十日に近衛様より御書被下候。紹巴よりも一札到来候。盛方院より寒中の葉、又々給候。七日。薩摩より安右衛門参り候。文など登り候。十一日。紹巴<sup>江</sup>助五郎遣候。紹巴より美濃紙十帖給ひ候。廿三日。近衛様<sup>江</sup>祇候。觀修寺どのなど将某仕候。笛の名人安中、其外公家衆御参会之座敷也。廿五日、

冬木にも春やたちへの梅花

と杉被遊候。<sup>（二〇ウ）</sup>

出る朝日の影さむき庭

と拙子仕候。廿六日。龍山様、光照院殿、入江どの、大炊御門殿、富田殿、昌叱など夜更るまで御酒宴也。廿七日。聖門様、龍山様又々

御参会也。廿八日。御家門様御馬に御乗せ被成候而、伏見<sup>江</sup>帰り侍るなり。慶長二年、伏見幽斎老御屋形にて年をこへ侍りぬ。

## 試筆

呉竹のふしみの里の朝霞

一夜をこめて老<sup>春殿</sup>や立らん

玄与

## 発句

こぞたちて今朝光そふ春日かな

同

七日の翌日初子なれば、」(二三才)

袖はへて若菜つむ野々ゆくてにや

あすの子の日の松をしめなん

七日の日。紹巴へ右の発句にて独吟百句申てつかわし候。そのかへりに紹巴試筆預候。

谷も今朝よそならぬ春のひかり哉

紹巴

又酔中の狂句とて、

皆人は世にあふ坂のせといへど

我身は老のくだり坂なり

同

又紹巴七十三歳の年の暮の晦日に、

へながらへてうき山ずみも七十の

三冬の暮のおしまるゝかな

と書附給はひ候。其時、筆など預り候なり。同十一日。丹州より幽斎御状被下候。」(二三ウ)

## 試筆

へ降る雪のふかき山路も春とたち

ことしとこへてかすむ道哉

二位法印玄旨

丹州千とせのうらちかき故、

立かへりちとせやよばふ浦の浪

同

十二日。近衛様より御書被下候。同日。物本一札薩摩衆町田入道存松より被頼書進候也。十六日。近衛様より御書被成下候。則出京申候也。同日。紹巴より合点の連歌至来候也。十九日。上京。いまたちたりにて一折あり。兼如同心也。廿日。観修寺殿<sup>江</sup>参候。さげざや被懸御意候一札也。廿一日。近衛様に一条殿御目にかゝり候なり。廿二日。」(二三ウ) 近衛様<sup>江</sup>富田殿祇候なり。廿三日。近衛様に連歌御興行。昌叱其外広橋殿、観修寺<sup>江</sup>弁どのなど西洞院など拙子も御連衆也。廿四日。紹巴にて一折興行。廿五日。北野<sup>江</sup>参詣なり。法楽に十首の歌よみ申候。近衛様も被遊候。かしら字を置候也。

家門繁昌そくさひあんど此字也。玄与、

## 夜梅

へ風なくておどかれけり春の夜の

夢路にかよふ梅の匂ひに

## 花近簾

へ百鳥のこゑさへ近しこすのとの

花の盛の明更の空

## 見花」(二三ウ)

へむらゝの霞も消へて蘆のやの

うらのみるめや花にからまじ

池辺藤

へ袖はへて折やかゝさん玉敷の

砌の池に匂ふ藤浪

浦帰雁

へくれ渡る浦半の波のかへるさや

雲井の雁の心なるらん

野旅行

へさらぬだに旅の衣の露けきに

小笹かたしく野路の夕暮

夕颺

へいつはあれどさびしかりけり山里の

くるゝ梢のむさゝびのこゑ

夜風雨（二四才）

へあけやらぬよるの船人いかならん

雨ふりそひてあらかきうらかぜ

海辺鶴

へむば玉の夜半の月影浦風に

さへまさりてや田鶴の鳴らん

祝言

ときわかぬめぐみのほどは春日山

みねの朝日のひかりにもしれ

廿六日。兼如にて一折興行也。廿七日。近衛様にて灯下片時に十首被遊候。愚詠も十首なり。廿八日。幽斎老御上着。吉田にて御目にかゝるなり。むすめくゝし小袖被下候也。廿九日。ふしみへ御下向御供申候也。大仏御門跡様江参也。二月朔日。古今真名序のせいだく伝受申候也。同日。宗牧一卷写申候。新古今注のかき添仕候なり。（二四才）

二月五日。京江登り申候。六日。近衛様糸桜の御所にて御連歌興行井御当座の歌有。七日。近衛様江幽斎老御案内者申参なり。十日。清水観音江参詣申候。法衆。

へ道かへて四方の梢に咲花も

あまねき春の光とぞみる

又清水寺にて、

へ足引の山かぜ吹かばちる花の

なみやこゆらん谷の梯ワザトカ

十一日。幽斎老より態御飛脚給ひ候。其故一条殿御連歌に参候得とも、ふしみへ下り申候。十二日。東條殿にて黒田如水老餞別の興行。

折枝やあひにあわれの糸柳

玄旨法印（二五才）

二月六日。近衛様糸桜の亭にて、かしら字を置いて御当座有。

山桜

ゝるひもなき花は吉野の山ざくら

ちらぬも散るも雪とみるまで

龍山

松藤

ゝみるまゝに池のさゞ波藤浪の

さそはれこゆる岩ね松が根

同

春日

ゝおろかにも誰かおもわん春日山

あまねき神のふかき恵みと

同

早春

ゝ千々の秋も宿にやへなん年々に

まづくる春をいそふ諸人

杉

水鳥知主」(二五ウ)

ゝ見るまゝにちかよりつゝも鴛鴨の

我に馴行池の松島

杉

伊勢

ゝまむれ猶きよき流れはわたらへや

いすゞの川の末絶ぬ世を

同

池柳

ゝ柳かげ梢をひたす池水の

そのみどりや猶増るらん

聖門様

朝萩露

ゝ一方はこぼれやすらん萩がへ

おもげにおける庭の朝露

同

石清水

ゝ長閑かなる其待へつゝ石清水

花をかざゝのけふの舞人

同

籬瞿麦」(二六オ)

ゝみだれそふ籬の露の玉敷の

床なつかしき花の色かな

一乗院

河時雨

ゝこゑ高き河瀬の浪や水上の

山風さそふ時雨成るらん

同

水辺月

ゝよせかへる浪間の蔭は遠近に

見へて涼しき秋のよの月

同

庭霜

ゝ日の残るみぎりながらも呉竹の

葉分の霜やかつ結ぶらん

玄与

夕納涼

ゝ庭の面の木々の露ちる夕風に

よそこにはふらん雨の涼しさ

同

二月十四日。伊勢<sup>江</sup>参宮申候。富田信濃守殿馬御馳走也。十四日に相坂<sup>二六ウ</sup>を越、大津、栗津を過て、みかみ山、かゞみ山などを見て、水口といふ所に着侍りぬ。十五日。すぐか山を越て安野々津に着ぬ。富田甚五殿、様々御馳走也。十六日。伊勢の山田<sup>江</sup>参着ぬ。みかしき太夫宿所<sup>江</sup>行侍りぬ。外宮内宮<sup>江</sup>参り、かたじけなさに泪こぼるゝと西行のうたおもひ合せ侍りぬ。外宮の前を流るゝ川みや川と申也。外宮の上に天の岩戸、たかまが原有。月読みの森有。内宮<sup>江</sup>は一里隔なり。内宮の前のはし宇治橋と申也。神ち山よりながるゝ水みもすそ川、その末はいすゞ川、その末がわたらへなり。是内宮也。うち山は内宮より南也。神ち山は東也。あさくら山は内宮より東也。ふたみの浦は内宮よりたつみ、大淀のうら其つゞき也。外宮内宮法楽に、<sup>二七オ</sup>

ゝ跡たれて世と安国と守りぬる

神のこゝろや猶も仰がん

玄与

ゝ浅みどり霞の衣打はへて

みもすそ川の名こそしるけれ 同

空かけて杉むらふかし朝霞

十七日。亦あのゝつ<sup>江</sup>帰り侍りぬ。又甚五殿乱舞<sup>ママ</sup>などて終夜の酒宴なり。十八日。すぐか山の麓、大山とてはらかの谷のうちに留まりぬ。雪ふり積りて明れば十九日大津<sup>江</sup>つきぬ。其夜紹巴<sup>江</sup>とゞまりて色々の物語なり。廿日。ふしみへ帰りぬ。八十瀬河はすぐか山のみもとなり。あこぎが浦はあのゝつよりはあなた也。鏡山の雪を見侍りて、ゝさへかへる空の霞は風に消へて

くもらぬ雪のかゞみ山かな

幽斎老いづれのうたも御気色にあひ申候。紹巴の宅所を別れ侍る時<sup>二七ウ</sup>節、扇など給り候。またはるぐ送り出られて、から崎の松、ながら山のつゞきかた、くまのゝ入江のあたりおしへられて、三井寺とひへの山の間は、しがのなり。相坂の走り井は大津のかたなり。大津を打出浜と申侍るなり。関の岩かど清水相坂のなかば也。廿二日。近衛様<sup>江</sup>参上。廿四日に禅高江雪参上。即興の御歌有。又御発句にて一折有。

さかぬ間や我を問来し花の友

杉

かげものどかに月うつるには

禅高

遣水のかすみを流すおときへて

江雪

田面のはらの雨ははれけり

玄与

同日。雨に糸桜をよみ侍る。<sup>二八オ</sup>

春雨のいと繰かけて庭のおもは

乱れあひたる花の色かな

玄与

咲出んみぎりの花の盛をも

松のときわに習へとぞ思ふ

同

近衛様御返し有。

咲ば散る花にはあれど今年より

松の常盤にならひてしがな

廿八日。吉田にて幽斎老御興行。

一たびにさかばいづれが初ざくら

昌叱

梅うつろへる軒の山風

玄旨法印

うぐひすのまがき隔つる声はして

如水

日野殿飛鳥井殿など御出座也。卅日に伏見<sup>江</sup>下り侍りぬ。

近衛様餞別の御歌被下候。」(二八九)

へへだつとも沖つ白浪たち帰り

又もきてみよ花の盛を

御返し申上侍りぬ。

へうき旅をわすれやせまし言の葉の

花の匂ひを袖にうつして

三月朔日。伏見口より船<sup>川</sup>に乗り大坂へ着き侍りぬ。二日。大坂にて

龍伯様<sup>江</sup>祇候。則御暇被下候。三月三日。住吉の塩干を見物申侍る也。

五首の法楽に、

海辺霞

へ春風はおさまりつゝも寄りてくる

波も渚の霞<sup>潮</sup>かな

玄与

春月

へ片敷の枕もとらじつくぐと

おぼろ月夜のかげをながめて

同 (二九〇)

苗代

へむら／＼にたてる梢は青柳の

みどりふかむる小田の苗代

玄与

松間藤

へ咲藤の盛りもしるし浦かけて

松の木の間も浪ぞ立ける

同

社頭花

千早振神の井垣に咲花や

春の手向の道にみゆらん

同

住吉の行あひの間、ほそ江、あられ松原、津守、遠里おのなどみ侍りぬ。住吉の花のかげにて、

かへるさもわすれこそすれ咲花の

陰をしめつゝ住吉の里

角て海上長閑にて三月十七日、月<sup>月</sup>に成て細嶋<sup>江</sup>着ぬ。夫より」(二九一)

庄内都城<sup>江</sup>廿三日に着侍りぬ。

(以下、群書類従本なし)

右拙子上路<sup>格</sup>の道すがら又京都にての事どもかき記し侍るものなり。

慶長二年卯月

墨斎玄与 (100)

文禄三年、近衛信輔卿薩摩御下向二候御離別之御餞別之御歌、

左二書記。

聖門様 別れてふ吹のみまたん涙のみ

玉まく葛のすゑの秋風

同

行末はいのらずとてもさすらへの

つらさをしれる神や守らん

近衛様御返し

云ひなしのつらさをしれる神と共<sup>そ</sup>

たのむは法の力也覺

同

あすよりは心づくしの秋まちて

葛のうら葉のおとづれを聞け

近衛様御親父龍山様

かくて世に身はむもれめや月に雲

かくるとやがてはろふさ夜風

(101)